口頭発表A⑤

大学間連携によるフィールドワーク教育プログラムの開発と実施

豊田哲也・玉真之介・田口太郎・塚本章宏・平井松午
（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）

１．事業の背景

平成25年5月に文部科学省教育再生実行会議が示した「人材力強化のための教育改革プラン」では、「学生を鍛え上げ社会に送り出す機能強化」が柱の一つに据えられ、「農山漁村も含めた地域におけるフィールドワーク等の体験型授業の充実を通じて社会との接続を意識した教育を強化する」ことが提起された。地域活性化に貢献しうる人材を育成するには、地域の実態を正しく把握する能力や課題に向き合う態度を養うことが重要であり、実践的なフィールドワーク教育は非常に有効な方法である。総合科学部では「インターユニ・フィールドワーク・プログラム（IFP2013）」と銘打って、平成25年9月に徳島県上勝町で5日間の合宿研修を含む教育プログラムを実施した。本年度は、授業科目「総合科学実践プロジェクト」（集中2単位）としてカリキュラムに位置づけ単位化している。本報告では、IFP2013の目的と経緯を紹介し教育成果の検証をおこなう。

２．目的と経緯

この事業の眼目は、以下の3点にある。

①大学間連携による教育プログラム開発

地域学系大学・学部等連携協議会は地域科学や地域貢献を標榜する全国の国立大学によって構成され、現在７学部が加盟している（北海道教育大学函館校、山形大学地域教育文化学部、宇都宮大学国際学部、岐阜大学地域科学部、金沢大学人間社会学域地域創造学類、鳥取大学地域学部、徳島大学総合科学部）。平成24年6月に本学部主催により「地域科学フォーラム」を開催し、同年11月には「地域交流シンポジウム・大学改革シンポジウムー地域の元気をつくるプレミアム人材の育成」を開催した。そこでは、協議会構成校が互恵・補完の立場から人材育成のための教育プログラム開発に向けて協力することが合意され、「インターユニ・フィールドワーク・プログラム」の第1回として、徳島大学が25年度に上勝町における合宿研修を試行実施することを提案し了承された。複数の大学から多様な分野の教員や学生が参加することで、協議会活動の実質化を図るともに、交流による相乗的な教育効果を期待できる。

②上勝学舎を拠点とする地域連携教育の推進

本学地域創生センターは平成21年度に上勝学舎を設置し、中山間地域における持続可能な発展や自然共生型社会の構築を目指し、人材育成や研究支援を展開してきた。今年度は、上勝町の全面的な支援を得て、継続的な地域再生活動とCOC型の拠点構想の推進を図ることになっている。今回のIFP2013は「課題の解決と新たな価値創造」をテーマとする上勝学舎の取り組みとしても位置づけられ、徳島大学として町民に開かれた学習機会を提供し、地域活性化に向けた社会貢献に資するという意義を有している。

③総合科学部の教育改善とカリキュラム改革

平成21年度の改組計画書において、総合科学部は従来の細分化された学問の垣根を越えて諸科学の融合を図り、「知の総合化」を目指すことを宣言した。これを実現するカリキュラムとして「総合科学テーマ科目」を設け、総合科学の視点と方法を獲得させるとともに、専門教育に幅と奥行きを保障することとした。その中で「総合科学実践プロジェクト」は、フィールドワークを通じ実践的で総合的な学習姿勢を体得させるための中核的な授業と位置づけられる。しかしながら、現状ではその目標が十分達成されているとは言えない。そこで、IFP2013を同授業に組み込み、課題解決・探求型学習プログラムの確立とカリキュラムの体系化を図りつつ、教育内容の改善と充実を目指すこととなった。

３．実施体制とタイムテーブル

（１）概要

期間：平成25年9月11日（水）～15日（日）

場所：徳島県上勝町
研修拠点：福原ふれあいセンター、月ヶ谷温泉
宿泊所：月ヶ谷温泉及び同キャンプ場コテージ

（２）参加者

徳島大学：教員5名、学生20名
　　ほかオブザーバ（補助）教員４名、事務員
鳥取大学：教員2名、学生3名
岐阜大学：教員1名、学生5名
合計：教員12名、学生28名

（３）目的

大学や学部、専門を異にする学生がチームを組み、フィールドワークを通じた相互交流を図りながら、地域科学を総合的に学ぶ機会とする。４泊５日のワークショップに参加し、地域活性化への取り組みの理解、成果＆課題の把握および改善提案までをおこなう。

（４）タイムテーブル

【第１日】
13：00　徳島大学総合科学部でエントリー
14：30　上勝町ごみステーション見学
15：30　開会式（福原ふれあいセンター）
16：00　町長他によるミニレクチャー
19：30　夕食交流会（月ヶ谷温泉）

【第２日】
9：00　まちづくりリーダーによるセミナー
13：00　調査課題の設定とグループ分け
　①葉っぱビジネスといろどり事業
　②棚田景観保全とオーナー制度
　③ごみリサイクルと環境問題
　④都市農村交流と農村起業
　⑤インターンシップとIターン
　⑥自然林再生プロジェクトと地域林業
　⑦行政組織と住民自治
15：00　グループワーク（１）調査計画の立案
19：30　グループワーク（２）調査の準備

【第３日】
終日グループ別にフィールドワークを実施
（現地観察、インタビュー、アンケートなど）
19：30　グループワーク（３）中間発表と討議

【第４日】
9：00　グループワーク（４）考察と発表準備
17：00　公開形式による成果報告会
19：30　夕食交流会（月ヶ谷温泉）

【第５日】
8：30　閉会式（総括、修了証伝達、優秀賞の表彰）
12：00　徳島大学到着後解散

４．教育効果の検証と課題

最終日に参加学生全員にアンケートをおこない（N=25）、「プログラムに参加したことで得られた成果」についてたずねている。ガイダンス時に説明した到達目標別に５段階評価の平均スコア（$1 \leqq x \leqq 5$）を求め以下に示す。

①地域を調査研究する方法を身につける　4.4
②地域の人々との交流を深める　4.3
③チームワークで課題に取り組む　4.4
④新しい友人をつくる　4.4
⑤課題解決に向けた提案能力を高める　4.0
⑥自分の生き方や社会との関係を考える　4.2

当日の一種祝祭的な高揚感の中での回答となった点を割り引いて考える必要はあるが、いずれも非常に高い値を示している。このうち⑤がやや低いのは、設定目標の難しさと「発表会でさらに明確な提言ができなかったか」という学生の自省によると思われる。また、「異なる大学の教員や学生がプログラムに参加すること」の意義に関する質問の平均スコアは4.8と極めて高かった。さらに、自由記述では、「最初は不安だったが参加してよかった」「充実した5日間でとても短く感じた」「通常の授業では得られない刺激を受けた」など肯定的な感想が多く寄せられた。

今回のIFP2013は3大学が参加する合宿研修という初の試みであり、事前の企画調整や予算確保には困難な面もあった。もっと参加人数を増やすべきだという要請もあるが、現地での交通手段の確保や施設の収容力など運用面での限界もある。今後のカリキュラム設計に向けての課題としては、単発のイベントに終わることなく、事前学習や事後学習を組み合わせて実施する体制をどう構築するかが重要である。今回の参加学生には地域調査に関する通年の実習科目を受講中の9名が含まれるが、それ以外の学生に対するフォローが難しい。また、プログラムの運営や指導にあたる教員スタッフを広く募集しその教育能力を高める方法についても検討する必要があるだろう。